

子供の頃から作文が苦手かつ嫌いであった。読書感想文をどう書いていいかわからず箇条書きで済ませたほどである。物理学を専門に選択した背景に、学問自体への興味と憧れに加えて作文をする機会が少ないという消極的な理由があったのかもしれない(筆者の出身高校では化学は実験レポートをたくさん書かされたが物理は比較して圧倒的に少なかった)。しかしながら、皮肉なことに大学院に入学して物理の研究活動を始めて以来、作文に費やす時間が年々増えてきている。原著論文の執筆は研究活動の主要部なので当然として、研究費・学振の申請と成果報告、研究会の提案と成果報告、訪問者との共同研究提案と成果報告、一般向けの研究解説、論文のカバーレター、論文誌の査読報告、など多岐に渡る。よりシニアな方々が言うには、これからまだまだ各種審査報告など増えていく一方だとのことである。一つ一つを見ればどれもそれなりの必要性を感じるものの、明らかに過剰負担で研究の生産性を著しく削いでいるものもあると思われる。特に、研究費の申請書はより簡素化すべきだと感じる。ほんの数人の審査員しか目を通さず、後世に伝わることもなく、3割程度(科研費の場合。種目によってはそれよりはるかに低い)の採択率しかない書類に申請者が相当の時間と労力を注いでいるというのは、学問の発展という意味では壮大な無駄である。研究費獲得実績自体が研究者評価の重要な指標になっている現状も、研究者、特にそれほど研究資金を必要としない若手の理論研究者が書かなくてもよい申請書を書いている大きな要因となっており、変えていくべきだろう。そのためには大学の基盤運営予算を削って競争的資金に当てるという国の方針を逆方向に変える必要があるが、論文の査読も一部の真面目な査読者に負担が集中する傾向があり、改善の余地が大いにある。例えば、海外のとある有名論文誌では、査読を短期間でこなせばこなすほどすぐさま次の査読依頼がくるという逆インセンティブシステムを採用しているが、これに対する改善策は明らかであろう。また極端なことを言えば、ほとんどの論文がプレプリントサーバ arXiv に掲載され各論文に対する引用数が明示されるこの時代に、匿名の査読者による審査など必要ないのではないかと。現状自分一人が arXiv のみに掲載して論文誌に投稿しないで済ます勇気と気概はないが、分野全体でそういう方向に向かって欲しいと本音では願っているし、科研費に関することを含め皆が作文過多の現状を認識・改善しようすることで作文の苦手な研究者の生産性が向上することを夢見ている。

I.D.